

ほすことになるのか、その国の将来に対する深い憂いを巻尾に「514 謫居春雪」を敢えて配置することで込めようとしたのではないかとというところには、一定の説得力がある。

そこには、道真個人が放免され、帰京を許されるという個人的心情を超えた、もつと大局的な、巨視的なものを、詩人・道真の意地をかけて、万感の念を込めて「514 謫居春雪」に託していると思われるべきではないかと考えた。そしてそれは「476 自詠」という巻頭に置かれている詩作品と照応させてみると、その道真の意図するものがより明らかにされるといふ、事実を実証してきた。そこにこの『菅家後集』の編纂にかける道真自身の執念というものを垣間みる思いがする。

さらに、もう一点、この詩をあえて巻尾に据えた意図の中に、既に波戸岡旭氏が言及されていることだが、『菅家文章』の巻頭の詩、道真十一歳時の習作「001 月夜見梅花」との呼応を意識したものがあることを見逃してはなるまい。一、二句に詠む「月の耀くは晴れたる雪のごとし／梅花は照れる星に似たり」と、この「謫居春雪」の「春雪」という詩題と、詩句一句目の「幾ばくの梅花ぞ」と比すれば、そこに「雪」「梅」という詩語を通して見えてくる道真の思いがいかなるものであったか、漢詩を解するものならでは自明のことである。

このことも道真の周到な意図のもとで、この詩の配置がなされている証左となり得るのではないかと考察した。

注

- (1) 算用数字は川口久雄校注『菅家文章 菅家後集』（日本古典文学大系）の作品番号を指す。
- (2) 川口久雄校注『菅家文章 菅家後集』五二三頁頭注。
- (3) 注(2)七三九頁 五一四補注(一)。